

お互いを認め合う児童の育成（1年次）

～ 楽しい学校づくりをめざして ～

1 主題設定の理由

子どもたちを取り巻く社会や環境は、常に変化し続けている。情報はあふれ（情報化社会）、価値観は多様化し、都市化、核家族化、少子化、地域共同体の変容など絶えず変わり続けている。このように社会性の育成が難しい環境の中で、子どもたちは好ましい人間関係を築くことができなかつたり、生活上の諸問題をコミュニケーションを通してよりよく解決することができなかつたりする状況が見られる。また、規範意識の低下に関しても重要な問題となっている。

本校の全校児童数は545名の大規模校である。そのため、学級集団の中で、お互いの多様な考えに触れることができるメリットがある。しかし、他の子たちの考えに頼ってしまい、なかなか自分自身を表現することができないままになっている子どもも少なくない。そのため、学級集団の中での活躍が一部の子だけに偏ってしまいがちになっており、学習の到達度や学級生活の満足感情において二極化傾向にあるのが現状である。また、人間関係づくりの乏しさに関しても重要な課題点である。実際、よりよい人間関係づくりがうまくできずにトラブルに発展している事例も少なくない。このような現状をうけ、子どもたちの関係性や発達課題、実際の学級の子どもやその場の集団の状況を鑑み、全教員の共通理解による、子どものよりよい人間関係づくりを目指した組織的な取り組みが重要となっている。

以上のことから、子どもたちのよりよい人間関係づくりを目指して、特に、学級活動の研究に取り組んでいくこととする。学級活動の目標には、「望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」とある。この学級活動で様々な活動を設定していくときに重要なことは、教員の意図的、計画的な指導で問題解決を目指すということである。それが、「希望や目標をもって生活する態度の育成」「よりよい人間関係の育成」につながると考えている。もちろん、その他の全ての教育活動においても同様のことがいえる。

つまり、子どもたちの実態を把握し時期を考えて、今の子どもたちにあったねらいのもと教員が意図的に、計画的に学級活動を実践していくことが、必然的に子どもたちのよりよい態度を育てる要因になるのである。

また、学級活動の中では、「活動内容の精選」、「コミュニケーション能力の育成」等も重要なポイントであると考えている。なぜならば、効果的な活動を通して、子どもが構成的に話し合ったり、ふり返ったりすることが自分たちの課題点に気づき（シェアリング）、自己の目標を設定すること（自己決定）ができたり、お互いを認め合って自己肯定感を感得させたりすることになると思われるからである。このように、集団の中で協力し合い、落ち着いて安心して生活できる環境づくりを目指していくことが、すなわち楽しい学校づくりに結びつくと考えている。

次に、具体的な方略として下記に示していきたい。まず、専門部には「環境整備」「学習スキル」「調査研究」という3つの部を軸において研究を進めていく（活動内容は下記参照）。

そして、重要視する方略は以下の3点である。

（1）Q－U調査*を活用する

Q－U調査を行い実態調査によって現状を把握し、満足型学級集団づくりに努めていきたい。めざすべき満足型学級集団とは、学級内に親和的な人間関係があり、子ども同士のかかわり合いや発言が積極的な状態である。学級全体に活気があり、笑いが絶えない学級である。ルールが内在化しており、その中で、子どもたちが主体的に生き生き活動している状態である。すべての子どもたちの居場所となり、子どもたち同士で支え合い、学び合い、生きる力を高めあっていく学級集団である¹⁾。そのために、援助が必要な子どもの実態把握を迅速に行い、必要とされる援助に努める。それは、個別の対応、常時活動として行う「一人一役」「良いところ探し」「ありがとう見つけ」などの活動、構成的エンカウンターを取り入れた授業、授業や生活の中で賞賛する場を意図的に設定することなど、多岐にわたると考えている。

※Ｑ－Ｕ調査・・・学級集団の状態把握のために用いる心理検査である。学級生活満足群（第１次的援助レベル）、非承認群（第２次的援助レベル）、侵害行為認知群（第２次的援助レベル）、学級生活不満足群（第３次的援助レベル）の４つのマトリックスに分けられる。

○環境整備

- ・「学年発表」の取り組み、「話し方・聞き方」、「声のものさし」などの校内掲示物の計画・作成を行う。
- ・各学級、学年での取り組みの奨励（伊万里っ子しぐさ、人権の絵本、いのちの教育等）※各部と連携
- ・備品の購入計画

○学習スキル

- ・学級活動や「伊万里っ子タイム（木曜日）」などの時間帯に活用できる、カウンセリングの手法を取り入れたエンカウンターやソーシャルスキル等のトレーニングの提案及び資料の提供を行う。

木曜日・・・（エンカウンター等のエクササイズ）

○調査研究

- ・Ｑ－Ｕ調査実施（６月、１２月）
- ・調査集計、考察
- ・文献、先進校視察などから得た資料等の提供
- ・啓発のための通信作成

（２）コミュニケーションを豊かにする（ルールとリレーションをもとに）

子どもたちが集団として行動するために必要なきまりとなる「ルール」に関しては、対人関係、集団活動、生活をする際のルールが全員に理解され、学級内に定着していることが重要である。また、互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流がある状態である「リレーション」を目指すことが求められる。このルールとリレーションをお互いに高めあうことが、よりよい学級集団の確立に結びつくといわれている²⁾。

この考え方のもと、授業や子どもとのかかわりにおいては、コミュニケーションを豊かにすることも重要な視点として意識したい。具体的には、場の設定、教員側のはたらきかけなどである。これらの活動を取り入れながら、学ぶことの楽しさを味わわせることや認められる喜び、自己肯定感といったことにも結びつけさせたい。お互いの関係をよりよくするために、子どもたち一人ひとりがコミュニケーションに参加することができるよう、教員が場を設定しコーディネートするとともに、全体が共感的な姿勢をもって対応していくことを重要視したい。

○教員がコーディネートする

■場の設定

（ペア）

一対一を基本に、隣の友だちときちんと言葉でやり取りできることを目指して、活動を行うよう工夫する。相手の話を最後まで聞くこと、分からなかったら聞き返すこと、やり取りによって話の内容が豊かにまとまることを経験することにつながる。

（グループ）

グループで活動する機会を増やす。一緒に何かを作ったり、考えを交換したりすることなども小集団のグループが単位になる。場合によっては、司会が必要であること、目的に沿って発言すること、賛成か反対か、どこが一緒にどこが違うかを明らかにすることなどを学ぶことも考えられるであろう。

（一斉）

学級全体の話し合いも行う。意見を主張する話し合い、反論に対して意見を返す準備などもする。内容を間違いなく的確に伝える話し方、相手を思いやった受け答え、表情やしぐさなどの大切さ、言いにくいことを言わなければならないときの言い方等にも触れさせることも重要である。

■教師の働きかけ（個から全体へ、全体から個へ）

- ・うながす・・・その子なりの見方・考え方を，全員に表出させるための教師の働きかけ

【例】問うてみる。

聴いてみる。

書かせてみる。

※「つぶやき」なのか「発表」なのかはっきりさせる。まわりの反応

- ・つなぐ・・・その子なりの見方・考え方を，他者と深めたり広げたりさせるための働きかけ

【例】・ある子の意見を他の子に言い換えさせる。

・ある子の意見を他の子に模倣させる。

・ある子の意見が長かったら，区切る。

・ある子の意見を意図的に止める。

・再現活動を行う。→ペア，グループ，近くの友だち

- ・もどす・・・見方・考え方を揺さぶったり新たな見方・考え方に止揚したりするための働きかけ

【例】・全体にかえし，考えさせる。「本当にそうか?」「なぜ，そう思う?」

・選択させ，理由をきく。

・書いてまとめさせる。

・上記のつなぐ活動と同様。

■自己対話にもどす

子どもたちが，学んだプロセスをふり返り，自らの学びを見つめる。何をかかせて，何をいわせるかを明確にする。「かくこと」で，学びに関係づけることをねらう。

【例】・（導入）課題と自分の気づきをノートにかき，解決する手がかりを探らせる。

・（交流）様々な他者の考えもかくことで，自分の考えや表現を見つめ直すことにつながる。

・（まとめ）授業で用いたキーワードをつなぎ，作文をかかせる。
構造的な板書の重要性

※リボイシング・・・子どもを尊重しつつ，教員が言い直す。

※1 子どもの思考が止まったときや，授業の流れを確認したいとき効果的

※2 子どもが分かりきったことを伝えるだけでは，くどくなる。それでは，単なる，教え込みになる可能性大である。あくまでも，子どもの発言を尊重する。

※直接指導言・間接指導言・・・子ども一人一人を見極めて，教員が言葉を発す。

※1 発表時，子どもの声が小さくて聞き取りにくい

※2 てまぜをして，話を聞いていない子どもがいる

※子どものたどたどしい表現を認める（「話す」「きく」）

- ・一生懸命説明をしても，なかなか相手に伝わらない。大人でもある。

→子どもの説明が，完成された言葉を使わないのは当たり前

→子ども目線の伝え方

→聴き手を育てるチャンスにもなる（〇〇ちゃんの言いたいことわかる?）

→聴き合う環境づくり→学級集団づくり→学級経営

（３）活動における学びを問い直す

活動における学びを問い直すとは、これまでの活動を通して、学んで見出した意味や価値を問い直すのである。すなわち、これまでの学びを自己にかえし、「自分は、何が変わったのか」「自分は、何を学んだのか」を見つめるのである。これは、今後の課題を見出すことにもつながるし、自分ができたりわかったりしたことを確認することで自信にもつながる。

教員も、活動前、活動中、活動後のふり返しを行うだけではなく、子どもの言葉を予想して見通しをもったり、子どもの言葉から活動を問い直したりする。そのために、学年、グループ等で綿密な会議を行う。そこで、子どもの学びの様子の変化を情報交換して子どもの実態を把握していく。それをもとに、教員は、様々な場面で「よくがんばっているね」と、子どもに返していく。すなわち、子どもに自信をもたせていくのである。これが、頑張っている子が認められる風土づくりにつながり、できる歓びを味わわせることになると思われる。

（４）生活や他の学習につなげる

生活・学習につなげるとは、体験を通して得た学びや問い直してきた学びを、ふだんの生活や学習につなげるということである。しかし、「～につなげましょう」と学んだことをお題的に子どもに伝えるだけでは、継続した学びとはならない。そのような表面的なものにならないためには、次の２点が大切になってくるであろう。

①学びをつなげる教師の言葉

これは、ふだんから教員が意識して使っていくことが求められる。その際上記にも示したように、直接的な言葉ではなく、レトリカルな言葉を使うと有効である。例えば、他者の話を聴くこと促す際にも、「聴きなさい」ではなく、「～の場面と同じだよ」と声をかけることで、子ども自らが判断して行動を変えていくのである。このような言語環境に慣れてくると、子ども自らが学びをつなげていくようになる。

②つながりを意識したカリキュラムづくり

意図的に学習内容をつなげていくようにする。例えば、入学当時の一年生のお世話や、下級生のお世話をしていることが、運動会でもよりよい関係づくりに発展し、そのときの指導につながる。さらには、各種大会、学級の中でのお互いの関係づくりにも結びつく。このように、カリキュラムは教員が設定しているが、次第に、子ども自らが学校での活動のつながりを意識していくことをねらっていくことも、視野にいれていきたい^{3) 4)}。

なお、学級活動の授業内容については、例えば、「学級や学校の生活づくり」、「日常の生活や学習への適応及び健康安全」に関すること等で実践をしていくこととなる。前者では、生活上の諸問題の解決、学級内の組織づくりや仕事の分担処理、学校における多様な集団生活の向上、後者では、望ましい人間関係の形成、清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解、心身ともに健康で安全な生活態度の形成などをねらい、学級会を行ったり活動を行ったりできると思われる。また、集団学習体験を通して、人間的な成長や行動の変容を図ることをねらった構成的エンカウンターなどのカウンセリングの手法や技法を取り入れた活動なども挙げられる。我々教員が、目の前の子どもたちにあった授業内容を模索し実践研究を行っていきたい。

2 研究の目標

お互いを認め合い、協力し合う子どもの育成をめざす

3 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ①Q－U調査を行い、実態把握に努めるとともに、よりよい人間関係づくりの効果的な方策を探る。
- ②学級活動の効果的な活動や指導について実践的に検証する。
- ③「伊万里っ子タイム」に関する効果的な活動を探る。

(2) 研究の方法

- ア 月数回の校内研究（全体会，学年部会，専門部会等）
- イ 授業実践（日々の授業，研究授業，事後授業研究会）
- ウ 諸調査による実態把握と指導面に関する共通理解
- エ 文献及び，講師招聘等による理論研究
- オ 教育関係機関の講座受講，先進校研究発表会参加
- カ 通信等による家庭への啓発活動
- キ ICT利活用教育